慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	乾杯の辞
Sub Title	
Author	田中, 明(Tanaka, Akira)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2009
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.1 (2009. 4) ,p.21- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 「いのち」の歴史学に向けて : われわれはいまどんな時代に生きているのか
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20090401-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

乾 杯 の 辞

田 中　　明

司会者がご紹介下さいましたように，私は二〇〇六年に日・中・韓三ヵ国の歴史家を含む講師団の先生方をお迎えし，歓迎と感謝の言葉を申し述べる役目をお引き受けしたことがございます。その折にも，私は一八七五年刊の『文明論之概略』の一節を引用いたしましたが，いま改めて，それと関連のある一節を援用いたしたいと思います。すなわち，

「欧人の触るる所は，恰も土地の生力を絶ち，草も木も其成長を遂ること能はず，甚しきは其人種を殲すに至るものあり，是等の事跡を明にして，我日本も東洋の一国たるを知らば，仮令ひ今日に至るまで，外国交際に付き甚しき害を蒙たることなきも，後日の禍は恐れざる可らず。」

この種の論述の多くの証例は，維新変革推進期の一八七五年段階に，福澤も東洋の諸民族・諸国民に共通な課題についての自覚を失わずにいたという解釈を許すものであります。ちなみに，慶應義塾の生んだ優れた歴史学者，中井信彦は『文明論之概略』が提起した問題は二つあると考えておりました。第一の問題は，科学と宗教の関係をいかに把握すべきか，ということ。第二の問題は，西洋文明受容後の日本文明もしくは東洋文明はいかにあるべきか，という問題だというのであります。このような論題を提起しながらも，自らは解決し得ずに福澤は難題を後世に置き残したのであります。

ところで丸山眞男によれば，『文明論之概略』は福澤の唯一にして最高の理論的な著作なのでありますが，最高の著作だということは，すでに登りつめてもうそれから先がない，最後の著作だということにもなるのでございまして，事実，この作品を境にして，福澤の思想は，変革の思想から反動の思想への転化の過程をたどり始めたのであります。一八七五年から僅かに二十年後の日清戦争に際して勝海舟伯が，日清戦争は大義名分のない戦争であるとして反対をいたしておりますのに，福澤諭吉は日清戦争を，文明の野蛮に対する「義戦」と称して熱烈に支持したという事実も看過することのできないところであります。これを要するに，明治維新変革の時代から日清日露戦争の時期にいたる日本の近代化と西洋化の過程において，勝ち得られたものと失い尽したものとの，正負差引き功罪相償うや否やという問題はいまもって答えも出されていない極めて現代的な問題なのであります。

慶應義塾はまさに今年，二〇〇八年に義塾創立の一五〇周年を記念するための，さまざまな企画をもっているようでありますが，このときにおよんで，福澤諭吉が父とも仰いだ緒方洪庵の医学の思想を――医学の知識と医療の倫理を福澤がいかに学び採り，しかしてまた，いかに学び落したか，

という問題の両面とその相互の関連についても，外来の講師の方々が遠慮なさらずに，より客観的に厳密な考究と検証を尽されますよう，強く希望し且つ期待してやまぬところであります。

それでは，講師団の先生方のより一層のご健闘と，講座の成功を心より願って乾杯をいたしたいと思います。では乾杯をいたしましょう，乾杯。

（名誉教授）